

カンチェンジェンガ山群、パンドラ峰北東壁 ～アルパインクライミングと「運」～

鈴木 啓 紀（パタゴニア日本支社）

頂上稜線に張り出す雪庇が一番小さいところ目指して、山頂へと続く最後の雪壁をゆっくり登っていく。雪庇をアックスで崩し、丁寧にステップを固めて這い上がった。パンドラの北東壁は足下になり、私は山頂に立っていた。苦しかった道のりを思い、そして、一方ではここからの簡単ではない下降を思いながら、私は雄叫びをあげた。

2024年10月29日、大石明弘と高柳傑、そして私鈴木啓紀の三人は、インド、チベット両国境にほど近い東ネパール、カンチェンジェンガ山群

の北のはずれに位置するパンドラ峰6,850mに、北東壁の登攀を経て登頂することができた。

山頂自体の第三登、北東壁は2016年のフランスチームに続く第二登。ルート下部は2015年の谷口－和田（敗退）のラインを採り、上部でフランスルートに合流している。

山の初登でも、壁の初登でもなかった。しかし、ヒマラヤの壁に自分たちのラインを引く、という大きな夢が一つ実現した瞬間ではあった。

思い返すと、ここに至るまでの道のりはそれなりに長かった。

私は、2007年から2014年にかけて、計4回、ヒマラヤにチャレンジしてきた。2007年に挑んだカラコ



登攀ライン全景

ルムのビックウォール、ハイナブラック・イーストタワーこそ成功できたものの、残念ながらその後3回挑んだネパールヒマラヤの登山はすべて敗退に終わっていた。10年ぶりの、そして5回目のヒマラヤ。本当に幸運にして、私たちはこの登山を成功させることができたのだった。

2014年の登山からの帰りトレッキングで、私はもう、二度とヒマラヤには来るまいと思っていた。高所への耐性のなさ、金銭的な負担、大きな休暇を取るハードル、そして肝心のクライミングに辿り着くまでの大変さ。ヒマラヤはもういいや、と。

しかし、2015年の暮れに友人の谷口けいが亡くなっ

3. 海外登山記録

てしまったことで、少し話が変わってきた。谷口、和田が登り残してしまった山を、残された我々で登ろう、という話が持ち上がったのだ。我々とは、前年に谷口とともにパンドラに挑んでいた和田淳二、谷口のことを一冊の本にまとめた大石明弘、そして私。最終的に和田は家庭の事情による参加できなくなってしまい、代わりに10歳近く若い高柳がチームに加わったのだが。

パンドラをターゲットにしてからの約9年は、私にとって、自分自身のクライミングを再構築する年月でもあった。大石や和田を含め、素晴らしい仲間恵まれ、黒部横断や剣岳北方稜線の完全縦走といった重厚な登山や、初登攀を含むいくつもの印象的な登攀を国内で積み重ね、そしてパンドラの前哨戦とも言えるハンター北壁を、大石明弘と二人で、2019年と2022年の二回のトライを経て登ることができた。

2019年はデブリベ이션を辿ってサードアイスバンドまで登るものの、悪天候に前進を阻まれ、チリ雪崩を打たれながら24時間をかけて下降というタフな敗退を強いられた。敗退には違いないが、私達にとっては全力を出し尽くしたよい登山ではあった。その後のコロナ禍を挟み、2022年に再挑戦、フレンチガリーを辿ってバットレスの頭に至り、さらに登り続けて山頂に立つことができた。実のところ、私は2005年にもハンター北壁に挑んでおり（まったく歯が立たず、壁の下部で敗退をした）、これは通算3度目の挑戦での成功だったのだ。山頂直下で、「登り続けてきたよかった」と思わずつぶやいてしまったこと、その瞬間の感情のうねりのことは、多分生涯忘れることはできないだろう。

そんなちょっとした成功体験を踏まえつつ、2024年秋、着想してから8年半の時を経て、ようやく私

たちはパンドラを目指してカトマンズに飛んだ。前述の通り、和田淳二は家庭の都合から参加を見送り、高柳傑がメンバーに加わっていた。

9月28日に我々三人はカトマンズに降り立った。私にとっては10年ぶり、大石は平出和也とともにチョー・オユーに登った時以来、23年ぶりのカトマンズだった。

カトマンズでは折あしく記録的な水害に見舞われ、全国的に大きな被害が出ていたタイミングとなり、だいたい波乱含みな遠征スタートではあったものの、タプレジュンを経て、10月4日には車で入れる最後の村、セカトムにたどり着くことができた。

ここからベースキャンプまでは途中順応のための休養を含め、8日間の行程だ。途中カンバチェンの手前からは、ジャヌーの北壁が恐るべき迫力で立ち上がっているのが間近に望める。現代アルピニズムの最高の課題の一つだ。

標高4,200mのカンバチェンで二泊、さらには人家のある最後の集落、標高4,800mのロナークで二泊。ロナークからは目指すパンドラの南面がわずかに望める。9年前、谷口達が来たときは、古い石積のロッジが2棟あるばかりだったというロナークには、新しくきれいなロッジが5-6棟も建っていた。いくつかなかなか良いボルダーもある。

そして10月12日、日本を出て2週間と少し、ようやく標高5,100mのベースキャンプに入ることができたのだ。ここまでは順応もまずまずうまくいっている。決まって午後には雲が沸き、時折雪も舞ったりするが天気は概ね晴れ基調だ。

15日から最大5日の予定で、順応と偵察山行を開始。氷河はこの数年で大きく後退したのだろう。左岸に続いていたチベットに抜ける古い交易路は完全に崩壊し、不安定極まりないザレ場に吸収されてい

た。そんなわけで我々は、極めて歩き難いモレーンを延々歩く羽目になり、壁の基部までたどり着くに一日半かかってしまった。

大石と高柳が夕闇の中、雲間に望める壁を初めて見上げた時は、とても登れたしろものではない、という雰囲気を感じたようだが、翌日晴れた中三人で見上げた壁には、何とか登れそうなラインを見出すことができた。しかし着雪着氷は極めて少ない。それにしても、9年前の写真と比べての周囲の氷河の後退は顕著で、まるで全然違う場所のようだ。温暖化の影響を顕著に感じさせる、なかなか壮絶な光景だ。

翌日はテントを担ぎ、パンドラの対岸にそびえる6,200m峰上がる。トレッキングシューズからダブルブーツに履き替え、標高6,000mちょうどまで上がったところで夕暮れが近づき、天気も悪くなってきたことから斜面を削り、テントを張る。

インリーチ経由で日本から送ってもらっている天気予報によると、その先の天気が少し流動的、かつ悪天の兆しもあったことから、早めにアタック体制を整えるべく、予定よりやや早く、10月18日夕刻、ベースキャンプへと戻った。順応登山中も我々三人の体調はまずまず順調であった。

ベースキャンプに戻った我々は、一旦標高4,800mのロナークまで下って休養を取ることにした。ロナークの快適なロッジで二泊、だいぶリフレッシュした我々はベースに戻り、10月24日朝、6泊7日の予定でベースキャンプを出発した。

10月24日、BC-ABC 荷物の大半をABCにデポしていたこともあり、5時間半ほどの歩きでABC着。いつの間にか天気予報は好転し、この先一週間ほど天気は安定しており、気温もやや高いとのこと、絶好のアタックチャンスだ。

10月25日、7時にベースを出発、氷河の段差を



アタックで使用したギア

ロープを出して越え、壁の基部のプラトーに上がる。壁に取りついたのは11時くらい。スカート氷雪壁を登ってからボロボロの岩場を越える。遠望した時は難しそうに見えたこの部分、極めて不安定なクライミングを強いられたものの、なんとか突破することができた。そこから右上するミックス3Pで雪壁に抜け、我々が氷柱と呼んでいた氷へとラインをつないでいく。本日はアイス1P登り、垂直の氷瀑の横の雪壁を削り、さらにはスノーハンモックでプラットホームを拡張してテントを張る。明け方からスノーシャワーが断続的にテントをたたいていた。

10月26日、傾斜の強い氷を3P登り、壁の中間部に位置する雪壁帯へと抜け出る。標高6,000mでの荷物を背負ったアイスクライミングは苦行だ。

ミックスも混じる雪壁帯を、コンテも交えて登り、雪壁帯上端の露岩の下を削ってビバークするが、この日はテントのスペースが斜めかつ狭く、標高も相まって非常に苦しい一夜となった。真ん中で寝ていた私は、左右から圧迫されて呼吸があまりに苦しく、夜中に何度か身を起して呼吸を整える始末だった。

10月27日、壁の中央部へと続く氷のランペを左上、

その後2016年のフランス隊のラインに合流する。ここは、彼らによってM6とされたミックスのピッチがあったが、積雪状況も違ったのであろう、快適なクライミングで楽しく抜けることができた。

そこからはやや傾斜の落ちたミックス壁から氷壁を数ピッチ登り、下からも顕著に見えていた大岩壁の基部でテントを張る。2016年はハーネスを外せるくらいの快適なスペースがあったようだが、今はテントを一張り張るのが文字通りギリギリだ。しかし壁中3泊目にして一番快適な一夜となった。



登攀3日目、やや傾斜の落ちたミックス壁を行く鈴木

10月28日、この日はサクッと山頂に登り、余裕でここまで下りてくる心づもりでダウンジャケット、行動食、テルモスだけをもって出発。

しかし出だしから不安定な雪壁、ミックス壁で悪い。壁の上部を支えるアイスフルートに入り込むピッチでは、昨日のM6のピッチ以上に厳しいミックスパートが現れるが、ここは高柳が集中したクライミングで突破。しかし時間はどんどん過ぎていく。1-2P程度と目算したフルートの氷は、3P登ってもまだまだ先がある。あと20mほどで壁を抜けられるか、と見えた最後のセクションをヘッドライトをつけて大石が行くが、ここは支点の取れない垂直のシュガースノーが50m近く続く最悪のセクションだった。



壁上部のアイスフルートへとつながるミックスセクションを突破する高柳

大石の渾身のクライミングで傾斜の落ちた雪壁へ抜けるが、もう時刻は20時を回っていた。その先も暗くて見通せないことから、我々はその場所で半雪洞を掘り、ビバークすることにした。

長く辛いビバークだった。時がたつのがビックリするくらい遅い。1時間半に一回、テルモスに残ったわずかなお湯を回し飲みする。手指、足指が凍傷にならぬ様、神経を使い続けた。

10月29日、夜明け前には風も出てきてますますきつい。一睡もできない夜が終わり明るくなってみると、山頂は近そうだ。ひざ下のラッセルをしながら100mほどゆっくりと登っていくと、山頂の雪庇が近づいてきた。

山頂では大きな感慨はなかった。頭の半分は、決して簡単ではない下降のことでいっぱいだ。しかしそれでも、登ってくる高柳と、次いで大石と抱き合おうと、涙が流れそうになってしまった。

山頂にいた時間は20分ほどだったろうか。北側には乾燥しきったチベット高原、目を南東に転じるとジャーヌーやカンチェンジェンガ、そしては西の方はあるか遠くにはマカルーやエベレストが望める。

消耗しきった体を無理やり動かして下降をしたが、

その日は岩壁下のテントまで帰るのが精いっぱいであつた。一瞬もう下山したかのような気分浸ってしまったが、まだまだ標高差1,000mもの下降が残っている。

10月30日、同ルートを懸垂で下る。下降はまずまず順調にいき、大きなトラブルもなく15時半には氷河に降り立つことができた。疲労困憊した体に鞭打つように歩いて日没直前、ABCに帰り着く。

この夜は、3人テントの外でデポしていたお菓子を食べながら、21時近くまでダラダラしていた。他の何をする気力もなかっただけかもしれないけれど。

10月31日、昼前からよたよたと下山を開始（登ってきた時より時間がかかった）、歩きにくいモレーンを必死になって歩き、17時、ガイドのパワンとキッインボーイのライマンが待つベースキャンプに帰り着くことができた。8日間のラウンドトリップだった。

一日の休養を挟んだ後、4日間のトレッキングでタプレジュンまで下り、カトマンズへと帰った。

出発前、正直6割ぐらいは登れると考えていた。そういう意味では必然の成功であつたような気もする一方で、やはり紙一重の成功であつたようにも思う。もし天気巡りあわせが悪かったら、もし壁の状態がもう少し悪かったら、もし壁の上部で正しいラインを見つけられていなかったら。何かが少しでもかけていたら登れなかっただろう。

2014年の秋、私は自分の力のなさヒマラヤに完全に打ちのめされていた。ヒマラヤ三連敗。運も実力も足りなかった。しかしそんな私は、亡き友人と生きている友人達に導かれ、改めてアルパインクライマーとしての自分を10年がかりで再構築することができた。

穂高岳周辺での継続登攀、剣岳での登山、米子の

氷や錫杖の壁などでの数多くの登攀。小さな成功体験を改めて積みなおすことで、その蓄積は2019年と2022年のハンター北壁へとつながっていった。そして言うまでもなく、ハンター登頂の経験を力に変えてパンドラに向かうことができたのだ。

最後に少し、登山における「運」というものについて考えたい。

30代の私は、フィジカルな意味ではあるいは今の私よりも強かつたろう。経験値が足りな過ぎたわけでもないと思う。しかし色々なものが足りていなかった。その足りなかったものを、「運」のせいにしたといはもちろん全く思わないけれど、もっと「運」を味方にできていたら、あるいは少しは違う結果になっていたかもしれないと思う局面もある。

今回、ある意味では運を味方につけることができた。そんな成功を体験して思うのは、「運というのは、成功体験の蓄積の上に花開くものだ」という漠然とした感覚だ。成功体験（これは、必ずしも登頂、完登とイコールなわけではないように思うのだけれど）の蓄積というものは、自分たちにある種の自信を与えてくれる。そして、その自信が登山にまつわるあらゆる局面で、自分たちを適切な判断に導いてくれるのだろう。

社会生活の中でも、自信を持ち、謙虚で前向きであることで、運も味方につけて物事を前に進められるような経験をしたことがある人は多いと思う。登山における「運」をそのように単純化して語るのは難しいかもしれないが、やはり、成功体験の蓄積とそれによって育まれる謙虚な自信は、あらゆる判断にプラスの影響を与えるという点で、「運」を呼び込む力があるのだろうと思う。

きっと30代の私は、もっと上手に成功体験を積み

3. 海外登山記録

重ねることができる良かったのだろう。しかし、いくつかの成功体験を重ねられたこの10年のクライミングも、その礎になっているのは、うまくいかなかった日々を含めたそれまでのクライミングの蓄積だ。

この四半世紀、多くの人々に支えられ、弛まずに登り続けてこられたことに深く感謝したい。長く登り続けていると、よいこともある。

この旅が始まった直後の10月5日、車が入る最後の村、セカトムの少し先のトレッキングルート上で、私たちのチームのスタッフであった、ティカ・バハドゥラルが、頭部に落石を受けて亡くなってしまった。

登山の続行について、私たちは悩み、メンバーや関係者との会話を重ね、最終的に続行を決めた。短い時間になってしまったが、この旅をともにしたティカさんに心からの哀悼の意を表したい。そして、ティカさんの家族、親族、友人の皆様に、心よりお悔やみを申し上げたいと思う。

ティカ・バハドゥラル、享年42歳。マカルーの麓の村、サンクワサアバ出身。カトマンズに奥様と11歳になる娘がいる。